

高齢者の友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響 (その2)

— 香川県さぬき市の老人大学受講生を対象として —

野邊 政雄 ・ 大須賀 翼*

本稿の目的は、高齢者が取り結んでいる友人関係のどのような側面が主観的幸福感に影響を及ぼすかを明らかにすることである。地方小都市である香川県さぬき市で老人大学の受講生を対象にサーベイ調査を2012年に実施した。この調査データの分析によって、次の2点を明らかにした。(1)サポートの授受を伴う友人関係ではなく、交遊する友人関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていた。そして、交遊する友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど、高い主観的幸福感をもっていた。(2)交遊する友人関係のなかでは、年賀状の交換をする友人関係、お茶を飲んだり食事をしたりする友人関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていた。そして、年賀状の交換をする友人関係、お茶を飲んだり食事をしたりする友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど、高い主観的幸福感をもっていた。

Keywords : 香川県さぬき市, 高齢者, 友人関係, 主観的幸福感, 老人大学

7 結果

(3)重回帰分析の結果

「相談ごとを話したり聞いたりする友人数」を独立変数に投入した重回帰分析の結果を表4に、「金銭の貸し借りや保証人になったりなってもらったりする友人数」を投入した分析結果を表5に、「2~3か月病気やけがで入院したとき、看病や世話を頼んだり頼まれたりする友人数」を投入した分析結果を表6に、「留守でしばらく家を空けるとき、留守の間の世話を頼んだり頼まれたりする友人数」を投入した分析結果を表7に示す。そして、「何かのことで失望したり悲しい出来事を体験してひどく落ち込んでいるときに心からなぐさめたりなぐさめられたりする友人数」を投入した重回帰分析の結果を表8に、「調味料や自転車を借りるといふことや買い物のときに車に乗せてもらうといったことを頼んだり頼まれたりする友人数」を投入した分析結果を表9に、「年賀状を交換する友人数」を投入した分析結果を表10に、「お祝い事をしたりされたりする友

人数」を投入した分析結果を表11に示す。さらに、表12は「お茶を飲んだり食事をしたりする友人数」独立変数に投入した重回帰分析の結果であり、表13は「一緒に遊びや旅行に出かける友人数」を投入した分析結果であり、表14は「訪問したりされたりする友人数」を投入した分析結果である。

表4 相談ごとを話したり聞いたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏重回帰係数	相関係数
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.015	-0.072
年齢	-0.213**	-0.181**
健康度	0.326**	0.353**
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.059	0.021
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.089	0.092
就業の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.063	-0.037
年収	0.060	0.117*
友人数① (相談ごと)	0.110	0.160**
R^2	0.186	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

岡山大学教育学研究科 社会・言語教育系 社会科教育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*さぬき市立志度小学校 769-2101 香川県さぬき市志度727

The Effects of Friendship Relationships of the Aged upon Their Subjective Well-being: The Case of Participants in a College for the Elderly in a Small City in Japan (Part II)

Masao NOBE and Tsubasa OSUKA*

Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Shido Elementary School, 727 Shido, Sanuki 769-2101

表5 金銭の貸し借りや保証人になったりなったりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.011	-0.072
年齢	-0.206**	-0.181**
健康度	0.335**	0.353**
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.047	0.021
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.104	0.092
就業の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.061	-0.037
年収	0.081	0.117*
友人数②(金銭の貸し借りなど)	0.044	0.048
R^2	0.177	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

表7 留守時の世話を頼んだり頼まれたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.007	-0.072
年齢	-0.206**	-0.181**
健康度	0.327**	0.353**
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.050	0.021
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.106	0.092
就業の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.058	-0.037
年収	0.082	0.117*
友人数④ (留守時の世話)	0.057	0.100
R^2	0.178	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

表9 調味料・自転車の貸借や車の同乗を頼んだり頼まれたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.016	-0.072
年齢	-0.206**	-0.181**
健康度	0.331**	0.353**
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.052	0.021
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.106	0.092
就業の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.063	-0.037
年収	0.080	0.117*
友人数⑥ (些細な物・サービス)	0.039	0.090
R^2	0.177	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

これら11の分析では、いずれでも年齢と健康度が主観的幸福感に有意な影響を及ぼしている。そして、標準化された偏回帰係数の符号から、年齢が低いほど、健康であるほど、回答者は高い主観的幸福感をもっていることが分かる。表6を例にとると、標準化された偏回帰係数の値は年齢が-.209であり、健康度が.341である。前者の符号が負であるので、年齢は低いほど主観的幸福感が高くなるということ

表6 入院したとき、看病や世話を頼んだり頼まれたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.014	-0.072
年齢	-0.209**	-0.181**
健康度	0.341**	0.353**
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.055	0.021
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.111	0.092
就業の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.064	-0.037
年収	0.081	0.117*
友人数③ (入院)	0.076	0.034
R^2	0.186	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

表8 なくさめたりなくさめられたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.025	-0.072
年齢	-0.207**	-0.181**
健康度	0.328**	0.353**
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.050	0.021
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.103	0.092
就業の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.064	-0.037
年収	0.082	0.117*
友人数⑤ (慰め)	0.091	0.130
R^2	0.183	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

表10 年賀状を交換する友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別 (男性: 1, 女性: 0)	-0.032	-0.072
年齢	-0.201**	-0.181**
健康度	0.315**	0.353**
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.049	0.021
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.117	0.092
就業の有無 (有: 1, 無: 0)	-0.060	-0.037
年収	0.045	0.117*
友人数⑦ (年賀状の交換)	0.147*	0.168**
R^2	0.192	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

を意味している。また、後者の符号は正であるので、健康度は高いほど主観的幸福感が高くなるということになる。これらの9つの重回帰分析では、友人数は主観的幸福感に有意な影響を与えていない。標準化された偏回帰係数の絶対値は、独立変数の影響力の大小を示している。これによって年齢と健康度の影響力を比較すると、健康度のほうが年齢より大きな影響力をもっていることが分かる。

表11 お祝い事をしたりされたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別（男性：1，女性：0）	0.013	-0.072
年齢	-0.209**	-0.181**
健康度	0.334**	0.353**
配偶者の有無（有：1，無：0）	-0.050	0.021
同居子の有無（有：1，無：0）	0.102	0.092
就業の有無（有：1，無：0）	-0.060	-0.037
年収	0.084	0.117*
友人数⑧（お祝い事）	0.010	0.019
R^2	0.175	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

表13 一緒に遊びや旅行に出かける友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別（男性：1，女性：0）	0.013	-0.072
年齢	-0.209**	-0.181**
健康度	0.336**	0.353**
配偶者の有無（有：1，無：0）	-0.048	0.021
同居子の有無（有：1，無：0）	0.102	0.092
就業の有無（有：1，無：0）	-0.056	-0.037
年収	0.086	0.117*
友人数⑩（遊びや旅行）	-0.011	0.036
R^2	0.186	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

表10の分析では、年齢と健康度だけでなく「年賀状の交換をする友人数」も主観的幸福感に有意な影響を及ぼしている。そして、年齢が低いほど、健康であるほど、「年賀状の交換をする友人」を多くもっているほど、回答者は高い主観的幸福感をもっている。標準化された偏回帰係数の絶対値によって、年齢、健康度、「年賀状の交換をする友人数」の影響力を比較すると、健康度>年齢>「年賀状の交換をする友人数」という順序になっていることが分かる。

表12の分析では、年齢と健康度だけでなく「お茶を飲んだり食事をしたりする友人数」も主観的幸福感に有意な影響を及ぼしている。そして、年齢が低いほど、健康であるほど、「お茶を飲んだり食事をしたりする友人」を多くもっているほど、回答者は高い主観的幸福感をもっている。年齢、健康度、「年賀状の交換をする友人数」の影響力を比較すると、健康度>年齢>「お茶を飲んだり食事をしたりする友人数」という順序になっている。

表4から表12の重回帰分析の結果を要約すれば、次のようになる。健康度と年齢は高齢者の主観的幸福感に有意な影響を及ぼしている。さらに、さまざま

表12 お茶を飲んだり食事をしたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別（男性：1，女性：0）	0.019	-0.072
年齢	-0.179**	-0.181**
健康度	0.328**	0.353**
配偶者の有無（有：1，無：0）	-0.053	0.021
同居子の有無（有：1，無：0）	0.086	0.092
就業の有無（有：1，無：0）	-0.076	-0.037
年収	0.056	0.117*
友人数⑨（飲食）	0.144*	0.212**
R^2	0.193	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

表14 訪問したりされたりする友人数を独立変数に入れた重回帰分析

独立変数	標準化偏回帰係数	相関係数
性別（男性：1，女性：0）	0.013	-0.072
年齢	-0.208**	-0.181**
健康度	0.334**	0.353**
配偶者の有無（有：1，無：0）	-0.050	0.021
同居子の有無（有：1，無：0）	0.102	0.092
就業の有無（有：1，無：0）	-0.062	-0.037
年収	0.085	0.117*
友人数⑪（訪問）	0.014	0.025
R^2	0.175	

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$

まな友人数のなかでは、「年賀状を交換する友人数」と「お茶を飲んだり食事をしたりする友人数」が高齢者の主観的幸福感に有意な影響を及ぼしている。

8 考察

(1)友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響

友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているとする仮説1を検討する。仮説1は、以下のようであった。友人関係は主観的幸福感に影響を及ぼしており、多くの友人関係を取り結んでいる高齢者ほど主観的幸福感が高い。また、友人関係のサポート面ではなく、交遊面が主観的幸福感に影響を及ぼしており、交遊する友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど主観的幸福感が高い。重回帰分析の結果によれば、年賀状の交換をする友人数とお茶を飲んだり食事をしたりする友人数が主観的幸福感に影響を及ぼしており、これらの友人を多くもっているほど主観的幸福感が高かった。年賀状の交換をする友人関係とお茶を飲んだり食事をしたりする友人関係は、交遊する友人関係であるから、友人関係のサポート面より交遊面のほうが主観的幸福感に影響を及ぼして

いるとする仮説1は支持される。

以上の仮説の検証結果を踏まえて、次の3点を考察する。第1に、なぜ年賀状を交換する友人を多くもっていると、主観的幸福感が高まるのかについて考察したい。年賀状の交換をするというとき、そこには2つの行為が含まれている。1つは、年賀状を相手に出すという行為である。もう1つは、相手から年賀状を受け取るという行為である。これら2つの行為は、どちらも主観的幸福感を高める方向に働いている。まず、年賀状を交換する友人を多くもっている高齢者は、年賀状を出すとき、たくさんの人とつながっているという意識をもち、まだまだ自分はこんなにたくさんの人とつながっているのだと思うことで、幸せを感じることができる。次に、年賀状を受け取ったとき相手の近況報告を聞いて安心したり、思いがけない友人からの年賀状を受け取って自分のことをまだ覚えてくれていると思ったりすることによって、高齢者は幸せを感じることができる。そこで、たくさんの友人と年賀状を交換しているほど、幸福を感じる可能性が高くなると考えられる。

上記の点に加えて、年賀状の交換がもつ、常日頃から交流のある友人とだけでなく、遠く離れていて普段交流することが困難な友人ともおこなうものであるという側面が主観的幸福感を考えるうえでは重要であると考えられる。遠くの友人ともつながっているという意識が、主観的幸福感を高める方向に働くのであろう。

第2に、なぜお茶を飲んだり食事をしたりする友人を多くもっていると、主観的幸福感が高まるのかについて考察したい。高齢者は、お茶を飲んだり食事をするなかで、お茶を飲むことや食事をすることそのものを楽しむことはもちろんのことだが、自分の近況報告をしたり、世間話をしたりすることも楽しんでいると考えられる。友人とさまざまな話を交わすことによって、楽しさを感じたり、ストレスを発散したりすることができる。ゆえに、お茶を飲んだり食事をしたりする友人を多くもっていることが主観的幸福感を高めることになるのだろう。ここで、情緒的サポートの友人関係である、相談ごとを話したり聞いたりする友人数が主観的幸福感に有意な影響を及ぼしていないことに注目したい。これは、そこまでこみ入った話をするのが主観的幸福感を高めるのではなく、お茶を飲んだり食事をしたりするなかで軽くて楽しい話をするのが主観的幸福感を高めることになることを示している。

上記の点に加えて、「お茶飲み」という行為そのものが主観的幸福感に影響を及ぼしている可能性について、斎藤美華ほか(2005)の研究をもとに言及

しておきたい。斎藤ほかの研究によれば、高齢者間の社会交流の1つとして、東北地方では、農・漁村地域を中心に「お茶飲み」と称した習慣がある。そして、その機能を生かして住民主体の高齢者健康づくり事業がおこなわれている。斎藤ほかの研究では、お茶飲みは主観的幸福感に影響を及ぼしていなかったものの、交流の充実感には影響を及ぼしていた。お茶飲みを広い意味で解釈すれば、この事例は、お茶を飲んだり食事をしたりする友人がたくさんいることが幸福な老いにとって重要であることを裏づけてくれるものである。本研究の結果は、高齢者が自力でお茶を飲んだり食事をしたりする友人を多くもっていたことが主観的幸福感を高めることになったのを示したものである。だが、斎藤ほかの研究で示された事例を踏まえると、政策的に考えても、お茶を飲んだり食事をしたりする友人を多く持つことができるようにしてゆくことが重要である。そのためには、行政の側が、高齢者が気軽に「お茶を飲んだり食事をしたりして話をする」ことができる場を設けていく必要があるだろう。

第3に、友人関係の質と主観的幸福感との関連について考察したい。なぜ、年賀状を交換する友人数とお茶を飲んだり食事をしたりする友人数以外の友人数は、高齢者の主観的幸福感に有意な影響を及ぼしていないのであろうか。これは、仮説で予想した、あまりに深い付き合いは高齢者の負担が大きくなってしまいうので主観的幸福感を高めることにはならないという考え方である程度説明することができる。とくに、サポートと交遊の比較において、この考え方は有効である。すなわち、高齢者の負担の大きさを高い順から列挙すると、手段的サポート>情緒的サポート>交遊となっている。

このように、サポートの授受を伴う友人関係より交遊する友人関係のほうが高齢者にとって負担が軽いことは、既存のソーシャル・サポートの概念を用いて説明することができた。しかし、本研究の調査結果を見ると、すべての交遊する友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているわけではない。すなわち、お祝い事をしたりされたりする友人数、一緒に遊びや旅行に出かける友人数、訪問したりされたりする友人数は主観的幸福感に影響を及ぼしていなかった。これは、野邊と同じ立場に立って予想した、主観的幸福感を高めるためには友人関係であればどのような友人関係であってもいいというわけではないという予想が当たっていたことを示している。本研究は、活動理論にさらに限定を加えることができたのである。

それでは、なぜそうなっているのか。ここからは、

その理由について、高年齢者の友人関係について質的調査をおこなった大森純子(2005)や藤崎宏子(1998)の研究を参考にしながら追究する。大森は、前期高年齢女性が家族を除いた身近な他者とおこなう交流の特徴として、「気遣い合的的日常交流」を挙げている。大森によれば、「気遣い合的的日常交流」とは、互いの日常に関心を寄せあいながらも、互いの尊厳を侵さないよう適度な距離感を保ち合い、日常的な交流を継続させる相互の行為のことである。そして、これを通して、自分の居場所を見だし、今日を生きる意欲を得て、いまの自分を確かめることができ、日々をつないで自分なりの人生を生きることができると大森は述べている。また、藤崎は、聞き取り調査の結果を踏まえて、私生活に深く立ち入らないことが高年齢者の友人関係にとっては重要なルールとなることを述べている。大森や藤崎の論考から、高年齢者の交遊と主観的幸福感を考えるにあたっては、適度な距離感が重要であることが分かる。これは、交遊する友人関係においても付き合いの程度が主観的幸福感に影響を及ぼしている可能性があることを示している。本研究の調査結果を踏まえると、付き合いの程度が深い関係よりも浅い関係の友人を多くもっているほうが主観的幸福感を高めることになると考えられる。

よって、次に、交遊の友人関係は付き合いの深さでどの程度であるかを検討する。表1に示したように、交遊する友人数の平均値は、年賀状の交換をする友人数>お祝い事をしたりされたりする友人数>お茶を飲んだり食事をする友人数>一緒に遊びや旅行に出かける友人数>訪問したりされたりする友人数の順番である。これによれば、友人数が多いほど、その友人関係は付き合いが浅いと考えられる。年賀状の交換をする友人関係やお茶を飲んだり食事をしたりする友人関係は友人数が多いから、これらの友人関係は交遊する友人関係のなかでは浅い付き合いである。それに対して、一緒に遊びや旅行に出かける友人関係や訪問したりされたりする友人関係は友人数が少ないから、これらの友人関係は交遊する友人関係のなかでは深い付き合いである。そして、それだけに高年齢者にとって負担のかかりやすい友人関係でもある。このことは、次のようなことで例示できるだろう。

まず、一緒に遊びや旅行に出かける友人関係について。一緒に遊びや旅行に出かけるためには、事前に予定を立てたり、準備をしたりしなければならない。また、実際に出かけることになったとしても、どうやって現地に行くかという交通手段の問題は、健康の面で問題が出始める高年齢者にとっては重大な

ことになりうる。このように、一緒に遊びや旅行に出かけることは、高年齢者にとってさまざまな点で負担がかかる可能性がある。

続いて、訪問したりされたりする友人関係について。訪問したりされたりすることは、一般的な感覚からすれば、それほど深い付き合いのように見えない。これについては、藤崎が明らかにした高年齢期の友情維持のルールによって説明することができる。さきに述べたように、藤崎は、私生活に深く立ち入らないことが高年齢者の友人関係にとっては重要なルールとなることを明らかにした。藤崎によれば、このルールから、他人の家に上がり込まないという付き合いの「場」に対する配慮が生まれてくる。この配慮には、友人に迷惑をかけたくないという気持ちも関係していると考えられる。このような友人への配慮を考えずに交流ができるということは、それだけその友人と深い付き合いをしているとすることができよう。ゆえに、訪問したりされたりする友人関係は、交遊の友人関係のなかでも深い付き合いに当たると考えられるのである。

以上、付き合いの深さの程度によって、交遊の友人関係のなかでどの友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼすことになるのかを考察してきた。しかし、これだけでは説明のつかない友人関係が存在する。それは、お祝い事をしたりされたりする友人関係である。友人数の平均値を見ると、お祝い事をしたりされたりする友人数は、2番目に平均値の大きい友人関係であることが分かる。にもかかわらず、お祝い事をしたりされたりする友人数は、高年齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていない。お祝い事をしたりされたりする友人数が主観的幸福感に影響を及ぼしていないことは、友人との交流の頻度がかかわっているのかもしれない。年賀状の交換をする友人関係やお祝い事をしたりされたりする友人関係は、年に1~2回しか交流する可能性のない友人関係である。その違いとしては、年賀状の交換は必ず年に1回おこなうものであるが、お祝い事をしたりされたりすることは年に1回必ずしもあるとは限らないということを挙げることができる。この違いが主観的幸福感に影響を及ぼすかどうかにかかわっていた可能性がある。いずれにせよ、これ以上のことを本研究の調査結果からは言うことができない。よって、付き合いの深さの程度に加えて、交流の頻度を考慮しつつ友人関係と主観的幸福感の関連の検討を進めていくことは、今後の課題である。

(2)配偶者・同居子の有無の効果

仮説2は次のようであった。配偶者がいる高年齢者

は配偶者がいない高齢者よりも主観的幸福感が高い。しかし、主観的幸福感は同居子がいる高齢者と同居子がない高齢者の間で違いはない。重回帰分析の結果によれば、どの友人関係を独立変数として投入した場合でも、配偶者の有無と同居子の有無のどちらも高齢者の主観的幸福感には影響を及ぼしていなかった。ゆえに、同居子の有無について仮説は支持されたが、配偶者の有無について仮説は支持されなかったといえる。

ここで、なぜ配偶者の有無について、仮説が支持されなかったのか、その理由を探究する。具体的には、2つの可能性が考えられる。第1に、配偶者の機能を別の人が果たしているという可能性である。本研究の調査対象者は、老人大学を受講している高齢者である。よって、健康である程度友人関係をもっている高齢者が多いと考えられる。そのような高齢者は、配偶者と同じ機能を別の人に頼ることができる可能性が高いと考えられる。

第2に、配偶者の有無の効果は、男性のみにあらわれるという可能性である。玉野ほか(1989)は、高齢者の社会的ネットワークのあり方は性別によって大きく異なっており、男性は主に配偶者に依存するパターンを示すことを明らかにしている。そうであるから、男性が配偶者を失うと主観的幸福感は大きく低下する(浅川・高橋 1992)。男性と比べると、女性は配偶者に依存した社会的ネットワークを取り結んでいるわけではないから、配偶者を失っても主観的幸福感はあまり低下しない。本研究の回答者の3分の2が女性であったから、配偶者の有無は主観的幸福感に影響を与えていなかったと考えられる。

(3)健康度の効果

仮説3は次のようであった。健康度は高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしており、健康な高齢者ほど主観的幸福感が高い。また、健康度は主観的幸福感に影響を及ぼす要因のなかで、最も重要な要因である。まず、仮説の前半部分を検証する。重回帰分析の結果によれば、どの友人関係を独立変数に投入した場合でも、健康度は主観的幸福感に有意な影響を及ぼしており、健康な高齢者ほど主観的幸福感が高い。よって、仮説3の前半部分は支持される。次に、仮説の後半部分を検証する。友人関係の付き合い内容ごとにすべての標準化された偏回帰係数を見ていくと、煩雑になるため、ここでは年賀状の交換をする友人数を投入した重回帰分析の結果を例にとり、具体的な数値を示す。健康度の標準化された偏回帰係数は.315、年齢のそれは-.201、年賀状を交換する友人数のそれは.147であった。標準化された

偏回帰係数の絶対値は、独立変数の影響力の大小を示している。標準化された偏回帰係数の大きい順から列挙すると、健康度>年齢>年賀状の交換をする友人数となっている。この結果より、健康度が主観的幸福感に最も強い影響を与える要因であることが分かる。ゆえに、仮説3の後半部分も支持される。以上の分析により、仮説3は全面的に支持される。

たとえ老人大学を受講しているような高齢者であっても、健康度が重要な意味をもつことは、注目に値する。本研究の調査のように、健康な人が多くいると考えられる集団を対象にした場合でさえ、健康度が主観的幸福感に影響を及ぼす要因のなかで最も強い影響力をもっていることは、高齢者の主観的幸福感にとって健康度がいかに重要なことを示している。

(4)社会経済的地位・年齢・就業の有無の効果

仮説4は次のようであった。社会経済的地位、年齢、就業の有無は高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしている。そして、社会経済的地位が高くて、年齢が低く、就業している高齢者ほど主観的幸福感が高い。重回帰分析の結果によれば、年齢が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしており、年齢が低いほど主観的幸福感が高かった。また、年取と就業の有無は高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしてはいなかった。これらの結果より、年齢については、仮説が支持される。仮説提起の段階で予想したとおり、年齢が低いほど将来を楽観的・肯定的にとらえることができるから、主観的幸福感が高くなるのであろう。

それでは、なぜ年取と就業の有無は高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていないのであろうか。その理由を探究する。まず、年取について。本研究の回答者の年取は低い方に偏っていた。具体的には、年取の平均値は230.40万円、標準偏差は148.60である。ほとんどの回答者の年取が低い場合、年取が高い人が少ないため、年取の低い人は年取の高い人との比較で年取の違いを感じるものが少なくなると考えられる。ゆえに、本研究の調査では、年取が主観的幸福感に影響を及ぼしていなかったのであろう。先行研究から、年取は主観的幸福感に影響を及ぼす要因のなかでも重要なものであることが明らかにされてきているが、都市の規模と年取の観点から考えると、年取の効果がどの程度重要なのかについてはまだ検討の余地があるといえる。

次に、就業の有無について。就業の有無が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていなかったことは、高齢期になると、仕事以外に生きがいを求めるようになることを示していると考えられる。働いている高齢者は、そこに生きがいを求めて働くのでは

なく、日々の生活を送る糧を得るために働いているのであろう。先行研究で就業の有無が主観的幸福感に影響を及ぼしているとしたのは、古谷野（1983）、西下（1987）、藤田ほか（1989）の研究である。これらはすべて、東京都という大都市を調査対象にした研究である。本研究の調査対象である地方と都市とでは、高齢者の就業に対する考え方が違うのかもしれない。また、これらの研究は今から20年前のものである。その当時、高齢者は働くことに生きがいを見いだしていたが、この20年の間に高齢者の就業に対する考え方が変化したと考えられる。いずれにせよ、高齢者の就業の意識については、今後、聞き取り調査などを積み重ねて、追究する必要がある。

9 結論

本稿の目的は、高齢者が取り結んでいる友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響を明らかにすることであった。本稿では、とくに、従来の研究では検討されてこなかった、どのような友人関係をもっていることが主観的幸福感に影響を及ぼすのかということを中心に明らかにしてきた。その過程のなかで、友人関係以外の要因が主観的幸福感に及ぼす影響についても探究した。分析で得られた知見は、次の4点に要約できる。

(1) サポートの授受を伴う友人関係ではなく、交遊する友人関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていた。そして、交遊する友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど、高い主観的幸福感をもっていた。このことは、友人関係の質を既存のソーシャル・サポートの概念を用いて、付き合いの程度の深さという観点から見ることによって、説明することができる。すなわち、高齢者にとって負担のかかる可能性が少ない、浅い付き合いが主観的幸福感を高めることになるのである。

(2) 交遊する友人関係のなかでは、年賀状の交換をする友人関係、お茶を飲んだり食事をしたりする友人関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていた。そして、年賀状の交換をする友人関係、お茶を飲んだり食事をしたりする友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど、高い主観的幸福感をもっていた。交遊する友人関係のうちのどれが主観的幸福感に影響を及ぼすかについても、付き合いの深さの程度によってある程度説明することが可能であった。しかし、お祝い事をしたりされたりする友人関係のように、それだけでは説明することができない友人関係も存在するため、交遊する友人関係について、より精緻な分類・定義が求められているといえる。

(3) 友人関係以外の要因では、健康度と年齢が高齢

者の主観的幸福感に影響を及ぼしていた。そして、健康で年齢の低い高齢者ほど、高い主観的幸福感をもっていた。さらに、これまでの先行研究の結果と同じく、本研究でも健康度が高齢者の主観的幸福感にとって最も重要であるという結果が得られた。

(4) 先行研究で重要であることが示された、配偶者の有無、同居子の有無、現在の就業の有無、年取といった要因は、本研究では高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしてはいなかった。

最後に、本研究の意義と課題を指摘しておきたい。本研究の大きな意義は、友人関係の交遊の側面が高齢者の主観的幸福感を高めることになることを、データによって明らかにすることができた点である。さらに、検討の余地は残るものの、交遊する友人関係のなかでも主観的幸福感に影響を及ぼすものと及ぼさないものがあることを示すことができた点も本研究の意義である。このような結果を示すことができた本研究は、活動理論にさらなる限定を加えるものである。

本研究の課題は、次の2点である。第1に、本研究の意義と関連した課題として、交遊する友人関係の分類・定義の問題を挙げることができる。今後、聞き取り調査をおこなうなどして、交遊の操作的定義の精緻化を進めていかななくてはならない。第2の課題として、本研究は、老人大学受講者を調査対象者としているため、今回の結果がどの程度一般化できるかについては、検討の余地が残る。今後、大規模な調査をおこなって、今回の調査結果がどの程度一般化できるかを検証していかななくてはならない。

(引用文献)

- 1) 赤澤淳子・水上喜美子, 2008, 「地方居住高齢者の社会的ネットワークと主観的幸福感」『仁愛大学研究紀要』7: 1-14.
- 2) 浅川達人・高橋勇悦, 1992, 「都市居住高齢者の社会関係の特質—友人関係の分析を中心として」『総合都市研究』45:69-95.
- 3) 安達正嗣, 2005, 「高齢期の人間関係」吉田あけみ・山根真理・桜井潤子『ネットワークとしての家族』ミネルヴァ書房, 158-172.
- 4) 石川久展・冷水豊・山口麻衣, 2009, 「高齢者のソーシャルネットワークの特徴と生活満足度との関連に関する研究——4つの地域特性別分析の試み——」『人間福祉学研究』2(1):49-60.
- 5) 大沢正子・西川千歳・中野悦子・村上明美・山本祥子・福島泰江・近森栄子, 1994, 「都市における高齢者のQOL(1): 主観的幸福感の測定と関連要因」神戸市立看護大学短期大学紀要 13 107-

- 124.
- 6) 大森純子, 2005, 「前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係に関する質的記述的研究」『老年社会科学』27(3): 303-313.
- 7) 小関祐二・戸梶亜紀彦, 2006, 「地区特性から見た高齢者の主観的幸福感に関連する要因の分析」『広島大学マネジメント研究: Hiroshima University management review』6: 111-120.
- 8) 小田利勝, 2003b, 「都市高齢者の友人関係に関する一考察」『神戸大学発達科学研究紀要』10(2): 491-502.
- 9) 古谷野亘, 1983, 「モラルに対する社会的活動の影響—活動理論と離脱理論の検証」『社会老年学』17:36-49
- 10) 古谷野亘, 1989, 「PGCモラル・スケールの構造—最近の改訂作業がもたらしたもの—」『社会老年学』29:64-74.
- 11) 古谷野亘, 1992, 「団地老人におけるモラルと社会関係—性と配偶者の有無の調節効果」『社会老年学』35:3-9
- 12) 古谷野亘, 1993, 「老後の幸福感的に関連する要因—構造方程式による全国データの解析」8(2):111-25
- 13) 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・横山博子・松田智子, 1995, 「都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」『老年社会科学』16: 115-124.
- 14) 古谷野亘・矢部拓也・西村昌記・高木恒一・浅川達人・安藤孝敏, 2007, 「地方都市における高齢者の社会関係—気心が知れた他者の特性—」『老年社会科学』29(1): 58-64.
- 15) 古谷野亘・安藤孝敏, 2008, 『新社会老年学—シニアライフのゆくえ』株式会社ワールドプランニング, 139-163
- 16) 斎藤美華・瀬川香子, 2005, 「前期高齢者の“お茶のみ”がソーシャル・サポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響」『東北大学医学部保健学科紀要』14(2): 94.
- 17) 谷口和江・浅野仁・前田大作, 1980, 「身体的活動レベルの高い男性高齢者のモラル」『社会老年学』12:47-58.
- 18) 玉野和志・前田大作・野口裕二ほか, 1989, 「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」『社会老年学』30: 27-36.
- 19) 直井道子, 1990, 「都市居住高齢者の幸福感—家族・親族・友人の果たす役割—」『総合都市研究』39:149-159.
- 20) 土居健郎, 1971, 『「甘え」の構造』弘文堂
- 21) 西下彰俊, 1987, 「中高年期のモラルの現状と変化」『社会老年学』25:30-43
- 22) 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野亘, 2000, 「高齢期における親しい関係」『老年社会科学』22(3): 367-374.
- 23) 野口祐二, 1990, 「被保護高齢者の主観的幸福感と健康感」『社会老年学』32: 3-11.
- 24) 野口裕二, 1991, 「高齢者のソーシャルサポート: その概念と測定」『社会老年学』34: 37-48.
- 25) 野邊政雄, 1999, 「地方都市に住む高齢女性の主観的幸福感」『理論と方法』14(1):105-23.
- 26) 野邊政雄, 2006, 『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶ノ水書房
- 27) 平野順子, 1998, 「都市居住高齢者のソーシャルサポート授受」『家族社会学研究』10(2): 95-110.
- 28) 藤崎宏子, 1998, 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館
- 29) 藤田利治・大塚俊男・谷口幸一, 1989, 「老人の主観的幸福感とその関連要因」『社会老年学』29: 75-85.
- 30) 前田大作・浅野仁・谷口和江, 1979, 「老人の主観的幸福感の研究—モラルスケールによる測定の試み」『社会老年学』11:15-31.
- 31) 前田大作・野口祐二・玉野和志・中野陽明・坂田周一・Jersey Liand, 1989, 「高齢者の主観的幸福感の構造と要因」『社会老年学』30:17-26.
- 32) 前田信彦, 2006, 『アクティブ・エイジングの社会学—高齢者・仕事・ネットワーク—』ミネルヴァ書房
- 33) 松本康, 1992, 「アーバニズムと社会的ネットワーク—名古屋調査による「下位文化」理論の検証—」『名古屋大学文学部研究論集』114:161-85.
- 34) 森岡清志, 2004, 「高齢者の変容とパーソナル・ネットワーク」森岡清志編『改訂版都市社会の人間関係』放送大学教育振興会, 170-84.
- 35) 雷秀雅・堂野佐俊, 2007, 「中国における高齢者の主観的幸福感: 嘉峪関市と深川市の場合」『山口大学研究論叢: 芸術・体育・教育・心理』56(3): 171-182.
- 36) Antonucci, T. C., 1990, "Social supports and social relationships. In Binstock, R. H. & George, L. K. (eds.) *Handbook of Aging and Social Sciences*, 3rd edition, 205-26, Academic Press.
- 37) Larson, Reed, 1978, "Thirty Years of Research on the Subjective Well-being of Older Americans," *Journal of Gerontology* 33(1): 109-25.
- 38) Lawton, M. P., 1975, "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision," *Journal of Gerontology*. (30): 85-89.

39) Wellman, B., 1979, "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology*, 84(5): 1201-1231.

（本稿は、野邊の指導のもとに大須賀が執筆した修士論文「地方小都市における高齢者の友人関係と主

観的幸福感——香川県さぬき市の老人大学を対象にして——」の第6章にもとづいている。調査、分析、執筆はすべて大須賀がおこなった。『研究集録』に投稿するために、野邊が論文の形式となるように若干の書き直しをした。）

